

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名 古 澤 拓 郎

本研究は、発展途上国における人口増加や現金経済の浸透に対して地域社会が取り得る戦略とその健康への影響を解明するために、急速に人口学的・社会経済学的環境が変化してきたソロモン諸島ロヴィアナ地域において長期間滞在して調査を行い、生業、食習慣と栄養状態を分析したものである。人口が希薄な農村部の世帯、人口過密な都市近郊部において定期的な給与を得ている世帯および自給的農業に依存している世帯の 3 世帯群間の比較、および農村部での世帯レベルの特性と生業および栄養状態との関係に焦点が置かれた。

1. 畑面積の計測、収穫高の計量、および活動時間調査から、都市近郊部において自給的農業に依存している世帯は、農村部における世帯と比べて面積あたりおよび活動時間あたりの農業生産性が低く、また各世帯成人 1 人あたりに調整された収穫高も低いことがわかった。この背景には人口過密にともない伝統的な移動耕作のシステムが崩れ、農業を持続的に行うことが困難になっている現状があった。このことはソロモン諸島においては人口増加に伴い自給的農業による食糧確保が難しくなっていることを示唆していた。
2. 現金収入源と収入額の詳細な調査と活動時間調査より、自給的農業に依存している世帯では、現金獲得活動に費やした時間あたりの収入額が、都市近郊部と農村部の間で差は無く、また各世帯成人 1 人あたりに調整された収入額も差が無かった。各世帯の現金獲得戦略の分析から、都市近郊部では都市型の現金獲得活動である労働や小売りによって得られる利潤が低いこと、および都市化にともなう環境劣化により資源採集

という農村型の現金獲得活動が行えなくなったことが、現金収入増加の妨げとなっていると考えられた。これは都市化に伴い現金収入が増えるという仮説、および人口過密への適応戦略として現金収入増加により食糧確保できるという仮説がソロモン諸島ロヴィアナ地域においては当てはまらないことを示唆していた。

3. 成人の食事調査からエネルギーおよび栄養素の摂取量と摂取源を分析し、世帯レベルの農業生産と現金収入との関係を分析した結果、購入食品である米・小麦などの輸入穀類は都市近郊部と農村部のいずれにおいても主要なエネルギー・栄養素源となっていた。また、これらの食品の摂取は農業生産の低い世帯に属する成人で多く、それは現金収入と無関係であった。この背景には、現地で食品を購入する場合に輸入穀類の方が現地農産物よりも値段あたりのエネルギー・栄養素量が大きいことがあった。またこの結果から自給的農業の生産が下がった場合に、輸入穀類摂取を増加させることでエネルギー・栄養素摂取を維持することがソロモン諸島ロヴィアナ地域においては適切な戦略となっていることが示された。
4. 農村部において身体計測を行い、BMI を求めてそれが 25 以上を過体重者として、世帯レベルの農業生産と現金収入との関係を分析したところ、農業生産が特に低い（第 1 三分位以下）の世帯において過体重者が高い割合でみられたが、現金収入との関係はみられなかった。このことから、農業生産で不利な世帯の成人が安価で高エネルギー食品を摂取することが肥満など生活習慣病のリスクとなる可能性が示された。
5. 農村部における世帯レベルの属性と農業生産および現金収入の関係を重回帰モデルにより分析した結果、農業生産高は利用できる労働力の大きさに依存しており、一方現金収入の大きさは世帯主が地域内で活動している企業（外国系林業会社など）での労働経験と関係していた。これは世帯での労働力確保が自給的農業生産のために必要であると同時に、現金収入の増加のためには労働で得た経験や知識を農村部で活用することが必要であることを示唆していた。

以上、本論文は信頼性の高い詳細なデータを収集し、人口学的および社会経済的環境の変化に対してソロモン諸島ロヴィアナ地域住民が取った適応戦略とその効果を評価し、都市近郊部においては低農業生産と低現金収入の世帯が多く、また農業生産の低い世帯の成人は輸入穀類摂取の増加とそれに伴う生活習慣病のリスクに直面していることを示した。また集団間および世帯間での差異に着目することで、同じ社会に属していても世帯によって戦略およびその影響が異なることも示した。本研究はこれまで詳細な研究がなされてこなかった、発展途上国における人口増加と現金経済浸透における生存および健康上の問題の解明に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。